

再会

昨年六月、父の五十年忌法要を営みました。父が死去した年、私は十二歳。小学校を卒業した直後の父の死でした。

父が病に倒れる直前の夏休みのことです。小学四年生の私は父親の有無をいわせぬ命令で、父の友人の大学教師、田井庄之助先生の自宅にひと夏預けられることになりました。学校から帰るとランドセルを放り出したまま、同級生と己斐の山を駆けまわって水蟲を探したり、暗くなるまで海や川で遊び呆ける私の日常を見て、父は息子の前途を憂えたのでしょう。そのころの父は五七歳。すでに人生の第四コーナーにさしかかっていました。それに父の事業は成熟期を過ぎ、衰退期に入りつつありました。

父は浴衣（ゆかた）のままスクーターにまたがって、まだ原爆の被害が生々しく残る広島町の町を東奔西走していました。私の小学校へも度々やってきて、授業の最中でも遠慮会釈なく教室の扉をガラツと開けて私に声をかけました。級友は父の声に一齐に振り向き、私は顔を赤くしてうつむくだけ。

息子に会うのに誰に遠慮がいるのか、というのが父の理屈です。はげ頭にカンカン帽、それに和服。特異な風貌もあって、友達からは「おじいちゃん」と呼ばれていました。

明治維新の余熱いまだ残る、明治三五年の生まれ。それでなくても頑固な父の命令は、家内で絶対の權威をもっていました。

田井庄之助先生は当時、広島大学文学部の教師。どういつながりだったのか、田井先生はしばしば我が家を訪れて、墨間から酒を呑んで父と長いあいだ話し込んでいました。何やら古ぼけた書物や木片を手にして、二人はヒソヒソ話。

田井先生を見送ったあと父は、

「きょうは田井先生が法隆寺にあったとかいう木の茶さじを見せてくれた。飛鳥の時代にもう、お茶を嗜むなどという習慣があったんじゃないだろうか……」と家族につぶやいていました。

田井先生は長机をはさんで父と向かい合うとき、長身瘦躯の身を左右にくねらせたり、机に頬づえをついたり、いつもなんだか落ち着かない様子でした。たいていネズミ色の背広姿、しわくちャのワイシャツ。ネクタイはいつも背広と同じネズミ色でした。ひよろつとした背を丸めて、鴨居をくぐるようにして座敷に入ってきました。

姉連は机の前で舞を舞う女性のような先生の仕草を見て、
「あのセンセイ、歌舞伎の女形みたいじゃあ」と噂をしていました。四十歳前で独身の田井先生に、父母はしばしば縁談をもちかけていたようです。

現・広島市西区草津町は当時、宮島街道にそって波が打ち寄せる海辺の町でした。街道の脇に魚市場があつて、たくさんのお魚が毎日荷揚げされ、威勢のいい仲買人たちの怒声が市場じゅうにこだましていました。市場を取り囲むように入り組んだ路地には小さな魚屋や、かまぼこ、竹輪などを商う店が生臭い匂いをふんぶんとさせて軒を連ねています。街道をしばらく西へ行くと、突然左手に瀬戸内海が開けます。

「先生の家の前はすぐ海なんよ」という母親の誘惑にも惑わされて、私の夏休みが始まりました。

先生の自宅は線路沿いにある小さな二階建ての洋館。後年、ヒチコックのスリラー映画「サイコロ」の舞台になった洋館の建物を見た瞬間、田井先生の自宅が脳裏によみがえりました。

玄関に向かって左手には山肌がせまっています、一階の洋室と山の断崖に挟まれるように小さな湿地帯がありました。そこには缶詰の空き缶が山のように積まれていて、でっかくて赤い爪をした弁慶蟹がそこそこ遊んでいました。彼らは一人ぼっちの少年の格好の遊び相手になりました。

先生の家での朝、曇、晩の食事はたいてい缶詰と木綿豆腐。家の脇に山と積まれた空き缶の意味がこれで解りました。二人だけの朝食を済ませると、先生の講話が始まります。この講話を終えて、曇食の片付けがすむまでは遊びに出してもらえませんが。

先生は濃灰色の着流しの和服に黒の帯。二人の部屋を包みこむような静しぐれのなか、長身の先生と、瘦せて豆粒のような小学生の私が和室の机をはさんで正座します。先生はたわいない古今の話を長々と続けます。それは日本やアジアの国々の通史であつたり、明治の文豪のエピソードであつたり。

「時は鎌倉時代、北条時頼の時代です。わかりますか？鎌倉時代。日本の歴史のなかで初めて、武家、サムライが実権をもって市民に命令し始めた時代です。その頃の執権、あつ、シッケンというのはサムライの親分のこと。この親分が貧しいお坊さんに姿を変えて、こっそり自分の領地を見てまわっています。



た。領民のありのままの暮らしぶりを観察してまわるのです。ある雪の降る夜のこと。その夜泊まる宿のあてもない時頼は、山のなかに一軒だけ明かりのついた家の扉を叩きます……」

こんな調子です。のちに知った、歴史物語「鉢の木」の一節です。

先生の話のあいだじゅう、私はお寺の小僧のように何度も正座をくずし、また座り直して耳を傾けます。大学生相手とは勝手が違って、小学四年生の私に飽かせず話を聞かせるために、先生は大いに苦心したに違いありません。

田井先生はしばしば中国の古典を私に講じることがありました。和綴じされた書籍を前に置いて、孔子の論語や老子の言葉を朗々と読んで聞かせたのち、その意味を解説します。そして、読み上げた古典の言葉を私にひらがなで紙に書かせ、それを私が再び読みあげるのでした。

子曰く 君子は重からざれば則(すなわ)ち威あらず。学も則ち固からず 忠信を主とし 己に如(し)かざる者を友とするなかれ。誤ちてすなわち 改むるに憚(は)ばかることなかれ。 【孔子】

人を知るものは智なり。みずから知るものは明なり。

人に勝つものは力あり。みずから勝つものは強し。

足るを知るものは富む。強(つ)めて行うものは

志(こころざし)あり。 【老子】

真夏の朝の陽が差し込む洋館の一室。高くもなく低くもない、田井先生の細い喉(のど)が中国古典の一節を響かせました。私はまるで古歌でも聴いているように、考えることもなくその音だけを聴いていました。

窓(まど)越しに見える瀬戸内海の海は大魚のウロコを剥(む)がしたようにキラキラと輝いて、あたかも長江を往来する小舟のような牡蠣(かき)いかだが遠く遠なっていました。

十歳の少年はあまりにも幼なく、あまりにも無知でした。彼が孔子や老子の世界にふたたび出会い、みずから理知を探り始めるにはそれからしばらくの歳月を要しました。

私が長じたのち、中国の古典にふれるようになって、あの小学生の時の懐かしい古文の一節(しばしば遭遇)することがありました。今振り返れば、田井先

生の講話は孔子の論語よりも、その世界観において孔子とは対照的な存在ともいえる、老子の発想によるものが多かったような気がします。

ひどく難解ながら胸肘張らず、あくまで自然で、制約を感じさせない老子の世界。利の獲得や立身のための競争とは無縁の、学究世界に棲む文学部教師の田井先生は老子の説を好んだのかもしれない。

リーダーのあるべき姿や心構えを説き、教訓的で自制を基調とする儒教、論語の世界。日本で長く続いた武家の治世、近代における維新、度重なる大戦の遂行、そして日本敗戦後の奇跡的な経済発展を推進したリーダーや知識人たちにとって、「仁・義・礼・智・信」の儒教の教えが、彼らの明快かつ効率的な行動規範になったことは否めません。対して老子は、人間は自然界のひとつの生きものであり、力みかえることをやめて自然体であれ、と戒めています。

「民に利器多くして 国家ますます昏（みだ）る」。便利な道具やござかしい知恵は人にとときの豊かさや時間の余裕をもたらすが、同時にそれは人々に怠惰と精神の貧困をもたらす。目先の知恵や欲望に駆られて動きだすところに人の不幸が生まれる。おのれの持つものをあらためて吟味すれば、そこには充分満足すべきものがあることを発見できるはずだ。どうして君はみずから我が身を縛って、あくせくと不自由な日々を送るんだ。

功名？ 欲望？ 栄達？ 財？ 地位？ それがいったいどうしたというのだ。やがて君はその立場や地位から離され、身につけた見識も財産も朽ちてしまつたろう。そして遠からずその身は、風が吹いたあとのように無となつてしまふんだよ。

論語とは明らかに異なる老子の視点がそこにあります。

そしてまた老子の言葉には、老子自身も含めた当時のインテリ達とは違い存在であったに違いない、圧倒的多数の庶民への温かなまなざしを感じさせます。民のほとんどは太陽と水の恵みを糧に日々生をつなぎ、人と情けを交歓しながら時代を生きてきたのです。歴史の出演者として名を残すことはないけれど、彼らこそ、歴史を刻んだ真の主人公だったと私は考えています。

いま私の手元に二冊の本があります。

その一冊は、今から約二五 年前に生きて古代中国の思想家、老子が残した言葉を、現代作家・新井清氏が感じるまま、思うまま自由に訳した老子の現代訳本「自由訳 老子」です。

老子 第四八章

学を為せば日々に益(ま)し 道を為せば日々に損す。
これを損じてまた損じ もって無為に至る。
無為にして為さざるは無し。天下をとるは常に
無事を以てす。

其の事あるに及んでは 以て天下を取るに足らず。

自由訳

世の中の行いには

足し算と

引き算がある

足し算は、たやすいが

引き算は、案外むずかしい

新しいことを一つ始めるよりも

余分なことを一つ減らしなさい

有益なことを一つ始めるよりも

無益なことを一つ減らしなさい

意外に思われるかもしれないが

そうする方が、きつとうまくいく

学問をおさめると

知識の量は日に日に増えていく

しかし、だんだんと

つまらない大量の知識にしばられて

精神の自由はうばわれて

身動きがとれなくなってしまう

ところが

道(Dao)に目ざめた人は

日に日に知識の量を減らしていく

よけいな知識をどんどん減らしてゆき

さいごには

無為の境地にたどりつく

知識にしばられていた精神は

解放されて自由自在になる

何ものにもこだわらず

あるがまま自然に生きられるようになる

ゆつたりとおおらかにね
それが道(Dao)の人の
生き方なのだよ

老子 第五章

古(いにし)えの善く道を為す者は、微妙玄通、
深くして識(し)るべからず。夫(そ)れ唯だ識(し)るべからず。
故に強いてこれが容を為さん。

予として冬(ふゆ)に川を渉るが若(ごと)く、猶(ゆう)として
四隣(しりん)を畏(おそ)るが若(ごと)く、儼(げん)として其れ
害の若(ごと)く、渙(かん)として其れ氷の將(まさ)に釈(と)けんと
するが若(ごと)く、敦(とん)として其れ模(ほ)の若(ごと)く、
曠(こう)として其れ谷の若(ごと)く、混として其れ濁れるが若(ごと)く。
孰(た)か能(よ)く濁りて以てこれを動かして徐(おもむ)るに
清(ま)ん

孰(た)か能(よ)く安らかにして濁りて以てこれを動かして
徐(ま)るに生(な)せん。

此の道を保つ者は、盈(み)つるを欲せず。夫れ唯だ盈つる
を欲せず。故に能く傲(やぶ)れて而も新たに成る。

老子 第四章

上士は道を聞けば 勤めてこれを行う。中士は道を聞けば
存(あ)るが若(ごと)く亡(な)きが若(ごと)く。下士は道を聞けば、
大いにこれを笑う。

笑われざれば、以て道と為すに足らず。

故に建言(ごんげん)にこれ有り。明道は昧(くら)きがごとく、進道は退(ひ)くが
若(ごと)く、真道は虚(らい)なるが若(ごと)く。

上徳は谷の若(ごと)く、広徳は足らざるが若(ごと)く、建徳は偷(おこた)るが
若(ごと)く。質真は渝(かわ)るが若(ごと)く、大白は辱(じよく)なるが若(ごと)く、
大方は隅(かど)無し。大器は晩成(ばんせい)、大音は希声(きせい)、大象は形無し
と。

道は隠れて名なし。夫れ唯だ道は、善く貸し且つ善く成す。

自由訳

道(Dao)に目ざめ

道(Dao)につながった人こそ

真の指導者になることができる

その特徴をあげてみようか

まず慎重である

氷の張った河面を渡る時のようにね

次に、用心深い

四方を敵に囲まれた時のようにね

つねに端然として乱れることがない

よその家に害として招かれた時のようにね

人柄は鈍朴で飾り気がなく親しみやすい

山から伐り出されたばかりの原木のようにね

心は広く 深い

まるで大溪谷のようにね

その水は清く澄みわたり

私利私欲に汚れることがない

それでいながら世俗のにごりに汚されること

をいとわない。やがてにごりは自ら沈殿してゆき

水はいつのまにか清く澄んでいる

彼は何をしたのか……？

何をしたわけではないのだ

世俗のにごりを自ら進んで浄化する人々の力

を信じ、いのちのエネルギーにゆだねたのだ

無為にして、無心

余計なことは一つもせず

ただあるがままを受け入れただけなのだ

忘れたがい特徴をもう一つ

彼は他人に完全であることを望まない

ほころびや欠陥があっても動じない

その方がかえって自然ではないかと思う

だから自分自身の成長にも

完成ということを考えない

大器晩成

この言葉をどう解釈すべきか……？

「大人物は、才能のあらわれるのは遅いが

晩年になって完成する」
そのように解釈する人々は多いであろう
しかし、彼はそう解釈しない
そのような解釈は不遜だと思ふ
彼は、こう考える
そもそも完成などありえないのだ
完成するような大器は、真の大器ではない
真の大器とは、晩年になっても完成しない
つまり永遠に未完成なのである
そんなことを思いながら
水のように
風のように生きていく
ゆったりとおおらかにね
それが道(Dao)に目ざめた指導者の
生き方なのだよ

それにしても、小学生の私をひと夏、田井庄之助先生の自宅に寄宿させた父の深謀はいつたい奈辺にあったのか。田井先生との密談のすえだったのか。父が亡くなってからというもの、田井先生の足はばたりと途絶えました。墨書の年賀状もいつしか届かなくなりました。



そしていま、私の手元にある二冊目の本は、もと大分大学教育学部教授、田井庄之助博士の執筆による随筆集、「曹源」。

長いあいだ探すともなく求めていた、師・田井庄之助先生の著書をインターネットという技術革新の助けを得て、ようやく手にすることが出来ました。

この古書のなかに「蘭星」と印刷された付箋が挟まっていました。その付箋にはかつて父に届いていた封書の宛名と同じ書体の、田井庄之助先生の墨書の署名がしたためられています。

初版は昭和五八年（一九八三年）。この書籍が誰かの書架を経たのち、古書市場に流れ、時はめぐって私の手元に到りました。

「曹源」を手にしたとき、五十年ぶりにふたたび田井先生の声咳にふれた思い出でした。

「曹源」のページをめくるとに、先生の生い立ちや初恋の体験を始めとして、その後しばらくの田井先生の足跡が手にとるように一覽できます。

先生のコレクシヨンと思われる青磁の茶碗や壺などの口絵写真のあとに、三章にわたって短歌や小文が発表年月を付して随筆風に紹介されています。

目次から一部の標題を抜粋します。

- 「思い出の能舞台」
- 「舞踏へのいざない」
- 「武者小路実篤」
- 「平将門」
- 「年越し」
- 「ひなまつり」
- 「久松藩」
- 「酒の味」
- 「喜寿の祝い」
- 「松坂に遊ぶ」
- 「五所平之助」
- 「正倉院展」
- 「鏡 奥の細道」

田井先生は能や歌舞伎などを中心とした、中世、近世日本の芸能史に通暁した研究者であり、同時に茶人であり、歴史家でもあったことがわかります。小学生の私が先生から受けた印象のとおり、文章は繊細で枯れた野のように素朴です。いかにも研究者らしく観察、描写の細部までが澄んでいて、行間には幽玄ささえ漂っています。

そして「曹源」巻末の「あとがきをかねて」のなかに、先生の広島大学時代の回想がふれられていました。

「……大学卒業後のことを少し話そう。卒業の時、教授に大学に残らないかといわれ、副手でということ、ありがたくお受けした。その頃、副手は無給がふつうだったが、有給でということだった。二年たつて助手となったが、折から新制大学となり、文学部に籍をおいた。（昭和）二十四年のことである。住所も転々としたが、（昭和）三十年以後は宮島線の学長官舎のとなりの小さな洋館で過ごした。近くには森戸辰男学長と書道の大家井上桂園先生がおられ、たびたびおじゃました。山本空外博士の邸宅も近かった……」

注・（ ）は著者

ああ、鳴きたてる蝉しぐれにおおわれた、あの古ぼけた洋館。そしてあの頃、大きな赤い爪の蟹たちのいた崖の上には、田井先生にとっておそらく雲の上の大先輩に違いない、大学学長や碩学達の自宅もあったんだ……。

当代最高峰の教養人たちが集って住まうあの森で、無限、無尽の思索の世界がこの世にあることすら知らない一人の小学生が、無邪気に蟹を追いかけて夏の日を送っていたのです。

「曹源」の奥付にある著者略歴を見ると、田井庄之助先生は一九二二年（大正十一年）のお生まれ。

もう、生きてお会いすることは叶わないところにおられるのだろうか……

*

平成二三年正月の四日、大分大学から電子メールが届きました。

「お問い合わせありがとうございます。」

大分大学教育福祉科学部総務係、衛藤と申します。

本日仕事始めのため、ご連絡がおそくなりまして申し訳ございません。

お問い合わせいただきました下記の内容についてご連絡いたします。

田井庄之助先生

大分県大分市**町*番地*号

電話 九七 *** ** **

現在、お元気に上記の住所にお住まいです。ことし八九歳になれるそうです。大学からの照会は奥様にご対応いただきました。お問い合わせの事は奥様にご連絡をしておりますので、もしご連絡等されるようでしたら、大分大学の事務の方に確認の上、とお話しくださいます。

私も午前中、田井先生宅にご連絡した際、御本人とはお話しすることが出来ませんでした。お元気にお過ごしの方ですので、お時間がありましたら田井先生の方にご連絡してみてくださいませ。なお、奥様には連絡先の公開等についてはご了承済みです。

お二人のご関係がとも温かいものだと思い、そのお二人を再度つなげるお役目をさせていただきました。今回はありがとうございました。また何がございましたらいつでもご連絡くださいませ。最後になりましたが、よい一年をお送りくださいませ。メールありがとうございます。

それは正月酒に酔ったあげくの、夢のなかで起こった出来事のように思えました。なかばあきらめていた、田井庄之助先生との再会がかなう……

田井先生は北西に由布岳、遠く東には豊後水道・佐賀関の海流も近い、別府湾の真南にあるお宅で夫人とともに老後を養っておられる様子です。

地図を見ると、ご自宅のすぐそばには蛇行する七瀬川が流れて、緑や田畑の豊かな土地のようです。

「曹源」のなかで先生は昭和五五年当時の住まいの情景を、次のように描いておられます。

「うぐいすの美しい泣き声が目がさめた。三月中旬の朝六時前のことだった。急いで起き出し、縁側に立ってみると、二羽、いや三、四羽とんでいる。ひよどりも勢いよくとんでいる。すずめもたくさんいる。麗日の空いっぱいには楽団が、楽団がかがやかにひろがっているかのようだ。(中略) リンゴとミカンを半分に分けて梅の木の枝にさしておいた翌朝の出来事である。それから時々やってみると、ひたきも来るし、めじるもやってくる。そして、熱心につついてきれいに食べる。リンゴが好

きらしいが、ミカンも皮だけのこし、その皮もなくなるくらい、みごとにつついている。なんだかいいことをしたような、あるいは友だちになつたような気分だ。……」

温暖な大分の土地で自然のうつろいを友として、ゆったりと陶然たる晩年を過ごしておられる田井先生の姿が想像できます。

そうだ、この寒さが過ぎて、うぐいすが鳴く頃になったら、先生をお訪ねしてみよう。

手土産を提げて、あたりを眺めながらゆっくりと山道を登る自分の姿が、腦のスクリーンにぼんやりと浮かんできます。

半世紀ぶりに出会う不肖の弟子を、老師はなんとという言葉で迎えてくださるでしょうか。

参照、引用文献

- 「老子」 (金谷 治 著) 講談社学術文庫
「新訳 老子」 (岬 龍一郎 著) PHP 研究所
「論語」 (貝塚 茂喜 訳注) 中公文庫
「論語」でまともな親になる (長山 靖生 著) 光文社新書
「自由訳 老子」 (新井 満 著) 朝日新聞社
「曹源」 (田井 庄之助 著) 桜楓社

この作品の執筆にあたり、

広島大学図書館 図書学術情報普及グループ 大園 岳雄氏、
ならびに

大分大学教育福祉科学部 総務係 衛藤 祐美氏

のお二人から、懇切きわまるご助力をいただきました。
心より厚くお礼を申し上げます。